

自我の解消  
-現象学的観点からのホモ・サピエンスからホモ・マキナリウスに  
至る人類の自我の歴史-

石 田 かおり\*

The Dissolution of the Self  
-The history of human nature's self from Homo Sapiens to *Homo Machinalius*  
on the perspective of Phenomenology-

Kaori ISHIDA\*

Abstract

In the last paper I argued about the identity of *Homo Machinalius*, which will have been born by integrating robots, AI and Homo Sapiens. In it I was based on the singularity theory, although it has radical aporias. The aporias are five. One is the aim of the study of AI is not the life intelligence but the absolute knowledge. Two is the symbolic ground problem. Three is the frame problem. Four is the problem based on the simple realism and the causality law. Five is the ultimate goal of studying AI is the omniscient ability, the God (Homo Deus). An abyss hard to surpass lies between Homo Sapience and *Homo Machinalius* as long as based on our modern science and technology. But this situation does not mean the study on *Homo Machinalius* is useless.

*Homo Machinalius* can change their bodies, brains and memories always and anywhere. The identity of *Homo Machinalius* is quite different from that of Homo Sapiens. Looking at the history of Homo Sapiens, the self is the product of Modern Times. If Homo Sapiens will evolve to *Homo Machinalius*, the history of the human nature's self can describe as this; in pre-modern the human nature had not possessed the self, in modern they acquired the self with inevitability, in the future the inevitability of the self will be lost. That is the dissolution of the self.

1 この論文で扱う問題

前論文では「ホモ・マキナリウス」が一定数に達した社会が到来した場合を扱った。「ホモ・マキナリウス」とは、人間拡張工学に代表され

る科学技術と人工知能の研究およびその社会的適用の進展の先に想定される人体と機械の一体化した新たな人類の名称である。前論文では想定される未来の人類ホモ・マキナリウスのあり

---

\*人間総合学群 人間文化学類 人間関係専攻

かたと、ホモ・マキナリウスの自我意識、さらには自我意識に基づいた化粧の意味の変質について考察したが、今回は前論文の補足から始めて、後半は自我意識についてさらに考察を進めたい。

## 2 シンギュラリティ説の問題点

前論文では結論の披露を急いだため、また、投稿規定の文字数の制限上からも、人工知能が人類の知能を超える技術的特異点であるシンギュラリティ説について、この説に問題点があるにも関わらずそこに一切触れることなく論拠の1つに組み込んで論を進めた。そのためあたかも筆者が無条件にシンギュラリティ説を信奉している、あるいはシンギュラリティ説の問題点を問題視していないかのように読むことが可能になってしまった。このことは本意ではあったが、やむを得なかった。しかし統論であるこの論文では、哲学研究の徒としてこの点に触れぬわけには行かない。

無論、筆者が問題だと考えているのはシンギュラリティが何年であるかという点ではない。2045年というのがシンギュラリティ説を代表するレイ・カーツワイル氏が提唱する年号だが、それが早まる、あるいは遅くなることは前の論文もこの論文もそこで論じている問題にとって無関係である。筆者が問題だと考えるのは、現在までの人工知能開発の理論と技術の延長線上にシンギュラリティを設けることに無理があるという点だ。このことは何人かの情報工学等の専門家が指摘している。各種の批判的考察の中でもここでは西垣徹氏の考察を中心にしながらシンギュラリティ説の問題点を明らかにしたい。西垣氏の考察がその精緻な論証過程と論証の妥当性の点でもっとも説得力が強いと考えられるからだ。

### (1) 目標とする知の問題

現在の理論と技術ではシンギュラリティの到来は見込めないという西垣氏の論拠の1つに、人工知能が目指す知の性質が挙げられる。知には生きるための実践的な知である生命知と普遍的な真理に至る絶対知の2種類がある。人工知能が目指す知は生命知ではなく絶対知である。それゆえシンギュラリティに達するということは人智を超えた絶対知に至るということになる。しかし人工知能は人間の脳を模倣している。もし人間の脳が完璧でないならば人工知能が完璧であることはできない。人間が絶対知に至ることができないならば、人工知能も絶対値に至ることができない。

仮に百歩譲って人工知能が目指す先は絶対知でなく生命知だとしよう。するとシンギュラリティとは人工知能が人類の生命知を超える時点ということになる。しかしこの考え方にも無理がある。あらゆる実践的知識には多かれ少なかれ意味の曖昧性が含まれている。実践的知識を表記しコンピュータに書き込む情報にするために用いられる用語には意味に広がりがあるため、組み合わせによっては知識と知識が矛盾することが生じる可能性がある。シンギュラリティ説はコンピュータが処理する機械的な情報の意味内容をいかに扱うかというアポリアを避けている。西垣氏は「避けている」と表現しているが、筆者には無視しているようにも見える。

### (2) 記号接地問題

人類が行う記号と意味内容を結びつける作業は、現在までの科学技術に基づいた人工知能には不可能である。コンピュータ内部の記号とそれが表す意味内容を結びつけることができないということだ。言語学者ソシュールが人類が用いる国語という言語について記号と意味内容の結びつきを恣意的・偶然的であると指摘してか

ら1世紀余りになる。その結びつきが恣意的・偶然的であっても、人間は記号と意味の結びつきに必然性を持って言語を使用して生活しているため、人類にとっては結びつける作業は容易である。そもそも言語の習得とはこの結びつきを習得することである。しかし機械にはこれができない。それが機械が人間を超えられない論拠の1つになっている。これを「記号接地問題」という。シンギュラリティの実現はこの問題を解決しなければ不可能である。

### (3) 他律系と自律系の中の乗り越え難い壁とフレーム問題

さらに機械と人間の相違点として生命体と人工物の根本的な相違点が挙げられる。生命体は自律的であるのに対して人工物（機械）は他律的である。生命体は自律系であるが、この「自律系」とは問題が生じたときに自分だけで解決する（対応する）ことができるという意味である。これに対して人工物は問題が生じたときに自身で解決し切れず、それゆえ対処できない問題を必ず抱えることになる。なぜかという、機械の判断は予め想定された枠組みに従ってそれをなぞっているからである。現在の人工知能は複雑になりすぎて人間が思考過程をすべて詳細に追跡することが不可能になってしまったため、あたかもディープラーニングによって機械が自ら思考して問題の解決策を編み出しているかのように見えるが、実はそうではない。ディープラーニングは出力としての答えの確率を高める作業に過ぎない。それゆえ人工知能の自律性は疑似的な自律性に留まる。これは古くから「フレーム問題」と呼ばれてきたもので、現在までの人工知能はフレーム問題をまったく解決できていない。

### (4) 素朴实在論と因果律に基づく問題

次なる批判の論点は、シンギュラリティ説の背後に存在する素朴实在論と因果律である。素朴实在論とは、宇宙とそこに存在する事物は人間の主観と無関係に現実に存在し、それゆえ観測や測定などを手段とする自然科学によって完全に解明することができるという考え方である。とくに自然科学は歴史的に素朴实在論の上に立った因果律に頼ることが多い傾向がある。たとえば観測精度を高めて観測結果を数多く積み重ねれば予知できるという発想がそれである。しかし因果律にも問題がある。宇宙の实在も因果律も、すべては人類がそのように見る（考える）からそう見えるに過ぎない。西垣氏は哲学者メイヤスを援用して、人類がそう見ているからそう見えるという立場を「思弁的实在論」と呼んでいる。筆者の立場である現象学からすれば、素朴实在論は観測の対象や結果の実体化ということになり、実体を指定するがゆえのアポリアの回避を図る現象学からすれば思弁的实在論は、素朴实在論よりも可能性が高い考え方である。万有引力の法則は人類が存在しなくても無関係に宇宙に存在しているものでありそれを人類が発見した、という素朴实在論は哲学ではすでに1世紀近く前には論駁されている。思弁的实在論によれば、万有引力の法則は人類の自然科学の考え方という枠組みの中で「発見」され、成立するものである。自分が依って立つ考え方には枠組みがある。しかし枠組みの存在を忘れて発見や法則が無条件の絶対的な真理であると素朴に信じてしまうことは、科学的態度とは言い難い。発見をもっとも重んじる学問ではうっかり素朴实在論に陥りがちなのはわからなくもないが、発見を発表する時点でもまだ枠組みを忘れて無条件の絶対的真理だという態度を取るならそれこそ非科学的である。一見すると人類の存在からもっとも遠く無関係に

見える数学でも、思考の系それ自体を思考系の内部から説明できないことが明らかになっている。さらに物理学では、物質が素粒子サイズの場合は古典物理学に由来する法則だけでは説明できず、観測者を前提にした説明をしなければならぬことが1世紀近く前には明らかになっており、現在では大学でも教えられるほど人類共通の知識になっている。そればかりか、こうした素粒子の特性を利用した量子コンピュータの開発が本格化しているところだ。このように素朴実在論は自然科学の中でもすでに効力を失っているにもかかわらず、人工知能の理論では暗黙の前提として根強く存在し、シンギュラリティ説を支えている。

#### (5) 全知全能を目標にする問題

(1) で人工知能が目指す知が普遍的真理に至る絶対知である場合の問題点を確認したが、このことについて西垣氏はさらに重要な点を指摘している。この絶対知という考え方に一神教的な文化的背景があることだ。人工知能がめざす知はこの世を創造した全知全能の神にたとえられる知である。シンギュラリティ後の人工知能が中心になった世界について解説したハラリ氏の書物のタイトルがこうした状態を象徴すると筆者は考えている。それは『ホモ・デウス』である(注1)。神としての人類という意味だ。われわれホモ・サピエンスという名称は知的人類という意味であるが、人類は神であるという意味がこのタイトルである。

全知全能の神またはそれに類する絶対的な唯一神という存在は、西洋近代に始まる自然科学がそれを論拠にしているものである。科学とは全知全能の神がこの宇宙の至る所に潜ませた単純で美しいエレガントな法則を見出すことであり、それさえ見つけられれば人類は神と同じ立場に立って何事も見通すことができる。理解だ

けでなく予知ができ、さらには創造もできる、すなわち神になれるという発想である。

哲学的な補足をすれば、こうした考えはキリスト教による社会支配が強くなった中世から盛んになり、現在でも西洋文化の根底に根強く存在している。近代科学の端緒に位置するデカルトは、人間を機械としてとらえることができると考え、そのことを証明しようと長年試みた。しかしそうしたデカルトでも、体は機械としてとらえられると考えていたが、精神は機械ではとらえられないと考えていたため、身体と精神の結びつきの問題である心身問題に悩まされ、本人も含めて誰しもが納得の行く形で説明することはついにできなかった。デカルトの問題は後世に多大な影響を与え、100年後の18世紀に哲学者ド・ラ・メトリが因果律を利用した『人間機械論』を著した。また、ド・ラ・メトリと同じ時代を生きた哲学者(微積分の発明などで知られる数学者・政治家など多方面で活躍)ライプニッツは、人間も含む宇宙全体を精巧な時計という機械にたとえた。全知全能の神が宇宙を創り、その宇宙の出来事はすべて機械として説明できる。しかもそれは予定調和である。その説明は次のようなものだ。ライプニッツは予定調和の説明を2つの時計の時間を合わせる例にたとえた。2つの時計の時間の合わせるには3つの方法がある。第1は2つの時計のしかるべき部分を連動させる方法、第2は瞬間ごとに時刻を合わせる方法、第3は時計をあらかじめ精密でまったく同じ動きをするものに作っておく方法である。2つの時計を精神と身体に置き換えると、第1の方法では両者の間を行き交う何かを想定しなければならないため無理がある。第2の方法では神に連続的な奇蹟を強いることになり、それも無理がある。そこで第3の方法が妥当だとして、あらかじめ同じ動きにセットしたという意味で「予定調和」と名付けた。こ

うしてデカルトが解けなかった心身問題の解決策をライブニッツは提示した。さらに、神は善なる存在であることからこの世を可能的世界の中でも最も善いものとして創造したという最善説も同時に主張した。では、万能の神が創った最善の宇宙であるはずのこの世に悪が存在するのはなぜかという問いに対しては、悪は被造物の不完全性に由来すると考えることで解決しようとした。被造物は不完全であるがゆえに悪が可能で、そうした不完全な被造物どうしの調和こそが最もよい世界の表れだと反論した。

このように宇宙を機械にたとえるのも、一神教的な全知全能の創造者を措定しているからこそ可能である。神がこの世のあちこちに秘密の言語で書き残した原理や法則を発見することが科学であり、その科学と科学から生まれた技術の粋を集めて突き詰めれば、やがて人間は神と同じ立場に立てるという素朴な信仰にも似た信念が西洋に由来する現代の自然科学の根底に流れ続け、シンギュラリティ説にも存続している。

### (6) 土台となる論理学の問題

以上が西垣説を軸に援用しながら明らかにしたシンギュラリティ説の問題点である。これに加えて筆者はもう1点、シンギュラリティ説には大きな問題点があると考えている。それは、コンピュータが依拠する論理学が抱える問題である。

論理学は古代ギリシャに登場し、その当時と比較すれば今日までの発展は相当なものであるが、当初から目指していた人間の活動を含む宇宙のありとあらゆる物事を論理学ですべて説明し切るという目標ははるか遠くにとどまっているという点では何ら変わらない。論理言語さえあれば宇宙の存在者も出来事も何もかもすべて語ることができる。しかも論理言語は明晰判明であるため誤解がない。さらに論理言語はいつ

の時代も変わらぬもので、人類なら誰しもその母国語と無関係に理解し使いこなすことができるという時間的空間的普遍性を持つ。こうしたことから論理言語は理想的、完璧な言語であるが、現実には論理学の成果がそうした言語に到達したことはない。こうした論理言語を操作する論理式を1と0という数値に置き換え、電流のオン・オフに置き換える論理回路から始まったコンピュータは、急激な発展を遂げて私たちの生活に欠かせないものになっている。事実としてはそうであるが、基になっている論理言語が人類が語れることのすべてをまだ語り尽くせず完璧に遠いうちは、シンギュラリティの到来は原理的に不可能である。

### 3 それでもホモ・マキナリウスを哲学で扱う意義

このようにシンギュラリティ説に数々の決定的な問題があるにもかかわらず、前論からなぜ筆者はホモ・マキナリウスの哲学を始めたのかという問いが生じるのは当然のことだ。こんどはその点について説明しよう。

前述のような理由から、現在の科学技術の延長上である限り人間の造り出した物が人間の能力を完全に超えるばかりか、完全無敵の完璧な存在者になることは考え難い。特定の身体能力を超える物は既にかつ多数創造されているし、身体能力上現在の人類を超えるものはいずれできると考えられる。しかし身体能力だけでなく知的能力が完璧に近いものや、人間の脳活動を機械にそっくりそのまま移行することは、現在の科学技術の延長上では不可能ではないか。それゆえホモ・マキナリウスの出現の可能性はまったくない、とは筆者は考えない。ホモ・サピエンスとホモ・マキナリウスの間には大きな断絶があると考えているが、それだからといってホモ・マキナリウスの出現がありえないとは考えていない。どのような過程でホモ・マキナ

リウスが実現するかはこの考察では問題にならない。現在の人類が持てる科学技術上ではあくまで理想にとどまり、未到の地点であり続けるとしても、ホモ・マキナリウスの実現につながるブレイクスルーが将来のどこかの時点で起きるのか、あるいは別の要因によりホモ・マキナリウスが出現するのかわからない。しかしそれは哲学を遂行する上でまったく問題にならない。ホモ・マキナリウスが出現する前にこのまま環境破壊を進めて人類が自滅することでホモ・マキナリウスの出現は不可能になるのか否かもわからないが、それもまた哲学をする上ではまったく問題ではない。問題になるのは現在の人類がめざしている人工知能の目標点がシンギュラリティであり、身体機能ばかりか脳機能も含めて現在の人類を能力的に超えた異なるタイプの人類であり、最終目標が全知全能の神と同じ地点に達した人類であり、ホモ・マキナリウスである。このことが確かだという点が哲学的には問題になる。それゆえ哲学的考察の対象にしたのだ。

哲学が問題にするのは想定しうるあらゆる事態である。シンギュラリティの実現が、あるいはホモ・マキナリウスの出現が、それらの実現可能性がどのようなものであれ、ホモ・マキナリウスが出現した場合、さらにはそれが社会の構成要員の中心をなす場合を想定することは、物事の根底や背景に存在する問題を徹底的に洗い出して真理への道を探る哲学としては研究上の使命ではなかろうか。ただしこの際に、デカルトのレス・コギタンス (res cogitance) と同様にこうして哲学的思考を遂行しているのがホモ・サピエンスであるため、ホモ・サピエンスの思考の枠組を超えることができないということは肝に銘じてどこまでも忘れてはならない。

人類に限界という枠組みがあるがゆえに人類の哲学には限界があり、その正しさには条件が

ある。それゆえ人智を超え人類を超えた存在を哲学的に考えることは無駄な徒労であるという考えが想定される。また、ホモ・サピエンスではない人類のことを考えると、そうした人類が出現したときにはホモ・サピエンスはすでに存在していないから無駄であるという考えも想定できる。これらの考えは説得力があるが、しかし、ホモ・サピエンスの科学技術が理想として追い求める先にシンギュラリティとホモ・マキナリウスがある限りこれらを哲学的議論の対象にする必要がある。さらにはそうすることでホモ・サピエンスの知を進めることができると考えられる。こうした理由からホモ・マキナリウスについて思考する意義は十分にあり、哲学的思考の素材として十分に堪えるテーマであるという結論に至った。

#### 4 ホモ・マキナリウスの自我

前論に記したように、ホモ・マキナリウスは身体も記憶も自由に選ぶことができ、常にいつでも交換可能である。選択可能性と交換可能性、さらにはこれら2つの可能性が機会的に恒常性を持つことから、ホモ・マキナリウスにはわれわれホモ・サピエンスが「自我」や「自己」と呼ぶようなものを持つことができたとしても、それはホモ・サピエンスの間で共通に認識されているような状態ではない。ホモ・サピエンスの「自我」や「自己」は、誰しも必ず1つだけ持っており、生まれてから死ぬまでの生涯に一貫性がある。病理的な理由などから一貫性等のこれらの性質を持つことが困難である場合はあるが、「通常」や「一般的」と呼ばれる状態では前述の通りの性質である。それゆえホモ・サピエンスの間ではこうした性質が共通認識となっており、人間関係や人間の社会はこれらの性質を前提に成立している。ホモ・サピエンスのこうした共通認識の背景には次のような身体

的條件が存在している。それは、だれもが必ず死する存在であることと、身体は交換不可能なものであること、たしかに身体は部分的には交換可能であっても少なくとも記憶は交換不可能であること、そして生涯を通じて1つの身体であることである。人工臓器や移植医療、義足や義手などの技術が目覚ましく発達しつつある現在でも、それらを使用しているからといって身体の一部が他人になったとはだれも考えない。むしろそうした元は身体の外部にあったものがそれらを装着している人物の一部と化して内部に移行すると考えている。生まれ持った身体のある部分をその人の身体の外部から取り込んだ後天的なものとの交換する場合に、どこまで交換すればその人物と言えなくなるのかという問いは、古くから考えられてきた。心が心臓にあると考えられていた時代には心臓を交換するとその人物ではなくなるという結論になったが、現在では心は脳にあると考えられているため、脳を交換するとその人物ではなくなるということになる。言い換えれば脳のほかはどれだけ交換してもその人物だという考え方が主流になっている。

心が脳にあるという考え方は近年の脳研究の進展から大いに支持を得ている。現在脳科学と心理学、さらには認知哲学と複数の分野にまたがる研究から心の正体を解明しようとする動きが社会から大きな関心と期待を集めている。こうした研究は現在の自然科学的思考方法によりすべてが解決できるというものであるため、前述のシンギュラリティ論が抱える根本的な問題点である素朴実在論と因果律の問題、さらには他律系と自律系の間壁の問題、記号と意味内容の結びつきのフレーム問題を抱えている点で人工知能の研究とまったく同じ性質を持っている。これらの問題は自然科学が近代以降に取ってきた思考方法に由来するため、自然科学

を基礎にする限りこれらの問題を抱えるのは当然の帰結である。それゆえ現在の心の研究は人工知能の研究ときわめて親和性が高い。そうしたことから人間の脳を丸ごと機械に移すことができる、肉体が死んだ後も意識だけが機械の中で生き続けることができる、それゆえやがて自我や自己は不死になる時代が来る、という考え方が生じる。こうした考え方がシンギュラリティ説と結びつく。繰り返しになるが、筆者はこうした研究の延長上に機械が意識を持つことや、シンギュラリティ説が成り立つことに対しては否定的である。しかし、それゆえホモ・マキナリウスは実現しえないと言っているのではない。実現の過程は哲学の問題ではないため問わない。ホモ・マキナリウスが出現したときに、それがどのような人間なのか、どのような社会なのか、どのような世界なのか、そこを問題にするのが哲学の課題である。

ホモ・マキナリウスにとって「自我」や「自己」は複数持つことができる。またその一貫性は必然的なものではでない。相手によって、また場面によって替えることで使い分けることもできるし、記憶を塗り替えることもできる。不死であるため毎回異なる人物として人生を何度も生きることが可能である。こうしたことから、自己同一性（アイデンティティ）はホモ・サピエンスのように重大なものでなくなると考えられる。現在の人類、つまりわれわれにとって自我や自己、そしてアイデンティティはこの上なく重大なものである。だれしも1つだけ持っており生涯一貫性を持ち、当人にとってもその人物を知る者にとってもかけがえのないものである。それゆえそれが個体である個人の核であるという意識を持っている（核を実体化するか否かの問題はここではさておく）。それゆえ自我や自己、そしてアイデンティティが危機に瀕すると、その人物のすべてがうまく機能しなくなり、生き

る意味を見失ったり、重い心身の病気になったりすることもしばしばである。それに対してホモ・マキナリウスにとってはこれらに必然性がないため、これらの価値がきわめて軽いものとなり、もしうまく機能しなくなったら機能するようなものに交換することで瞬時に問題が解決する。「解決」というより「解消」と表現したほうが適切かもしれない。それゆえわれわれホモ・サピエンスが共通に持っているような自我意識はホモ・マキナリウスに至ると消滅すると言うことができる。「自我」「自己」「アイデンティティ」が成り立たないということは、「主体」や「主観」も成り立たない、さらには「責任」や「自由意志」も成り立たないことになる。「個人」も同様である。何らかの肉体を持っているならば一応それが個体としての個人ではあるが、たとえば現在の技術でもインターネット上の膨大な知識や経験にアクセスして個体としての個人の知識や経験の限界を容易に超えることができることを考えると、ホモ・マキナリウスの時代には個体や個人がどこまでかを確定することは不可能であると考えられる。個体としてとらえるより集合体としてとらえる方が適切かもしれない。ライプニッツのモナドのように、個体であっても集合体の1種の局面をその瞬間に映し出している状態に過ぎないという事態である。このように、シンギュラリティのような全知全能でもなく、人間が初期設定したのでもなく、それらを超えたところに未来の人類の在り方を見るとするなら、「自我」「自分」「わたし」「個人」「アイデンティティ」といったものが意味をなさなくなる。こうした事態をもっとも適切に表現する語が「自我の解消」であろう。

## 5 自我の歴史

前述のように自我意識はわれわれホモ・サピエンスにとって不可欠でかけがえのないもので

ある。それゆえ自我意識がかけがえのあるものという状態は恐るべきもののように見えるが、果たしてそうだろうか。歴史を見れば、自我意識はホモ・サピエンスにとって必ずしも必然的なものではなかったと言えるのではないだろうか。自我を哲学の起点に据えたデカルト哲学の登場以前、たとえば中世を考えてみよう。西洋では神が宇宙を支配する唯一の存在とされ、神に選ばれて権限を委託されたと社会が認めた者が宗教的指導者や政治的統治者となってこの世の秩序を維持した。無論宗教的指導者も政治的統治者も人間であり、人間は不完全な被造物であるから、神の代理だとしても誤りを犯すことがあり、神の意志を完全に反映した秩序が保たれたわけではなかった。こうしたものの見方をする社会では、人称代名詞として自分を指示するものはあっても、自分を含めてすべての人や物は神に所属するものであり、人智を超えた神が秩序を保つ根源にあるという認識であるため、近現代人が「自分」というような自我の自己理解とは異質の自己理解である。

さらに古代ギリシャに遡り、西洋哲学の父ソクラテスの例を考えてみよう。ソクラテスが哲学を始めた契機は神殿に掘られた語句「汝自身を知れ」だという有名な逸話がある。その真偽はともかく、現代人のわれわれは「汝」を近代以降の自我ととらえがちであるため、この逸話を聞くとソクラテスはデカルトの魁に見えてしまうが、果たしてそうだろうか。哲学的議論を盛んに行なった古代ギリシャの貴族階級の男性であっても近代以降の自我の概念は持っていない。神殿に掘られたこの箴言は節度を超えぬようにという警告だと考えられている。プラトンが書き残したソクラテスの軌跡を見ても、ソクラテスが生涯をかけて自我の追究をしたとは考え難い。

西洋中世で支配的であったキリスト教は一神



教の中でも代表的なものの1つだが、このほかの代表的な一神教にユダヤ教とイスラム教がある。これら三者はいずれも神と人との契約を教義や信仰の基礎に持っている。契約と聞くと、現代人は個人と個人の間、あるいは個人になぞらえた組織と個人の間など、個人を単位に考えてしまうため、これら3つの宗教では近代以降の個人が発生の当初から存在していたかのようにとらえてしまいがちだが、そうではない。発生当初は個人が所属する部族と神との契約であり、後に部族が国家となり、やがて個人となった。たとえば西洋史では、古代ローマ帝国がキリスト教を公認したときにはローマ皇帝と神との契約で、皇帝の支配下に個人が所属していた。中世はローマ法王と神との契約があり、その下に法王と王との契約、その下に王の貴族の契約、さらにその下に貴族と荘園の民との契約という形式であった。たとえば荘園の民である一農民を個人としたときには、その個人は近代以降の個人ではなく貴族と契約をすることで荘園に住みそこで労働して税を納める役割の者という認識であった。こうして考えてみると、ルターの宗教改革のラディカルな性格が明らかになってくる。ルターは信仰の個人内部化を唱えた。それはこれらの仲介者をすべて排除した神と個人との契約ということになる。それゆえ、近代的個人の萌芽ということができるからだ。

では、デカルト哲学には近代的な個人があるのか。それは近代的個人とは言い難い。デカルト哲学には大前提として神が創った宇宙の完全性への無条件で絶対的な信頼があり、その完全なる宇宙と神の存在を証明することが最終目的であったからだ。この目的を達成するための思考過程で、何があってもその存在を疑うことができない *res cogitans* が存在することに気づいたのであって、*res cogitans* が哲学の最終目的ではないからだ。確かに *res cogitans* を発見し、

そこから理論を積み始めた点に近代の萌芽は存在する。しかし、デカルトの思考は近代の枠組みではなかった。そうしたこともあってか、デカルトに影響を受けたりデカルトを反駁しようとした後の哲学者たちは、前述の人間機械論やライブニッツのようにすべて神の完全性の証明という最終目的という前近代の枠組みを強固に維持し続けていたため、近代的な自我という概念には到達しなかった。イギリス経験論やルソーに代表されるフランス啓蒙主義の社会契約説に至ってようやく近代的な自我の片鱗が見られる。そして、これらの流れの先にフランス革命の人権宣言が登場して初めて近代的自我が確立したと言えよう。

翻って筆者の生まれ育った日本の状況を考えてみよう。日本人が近代的自我を知るきっかけは明治維新による西洋化と近代化であるが、それはあくまできっかけに過ぎない。人の意識や価値観はすぐには変わることができないからだ。それ以前の時代、たとえば明治維新の前の江戸時代には、自分自身を指示する人称代名詞は社会的地位や職業、性別などの社会的属性によって多様なものがあつた。それらが今日のわれわれが考える「私」や「自我」であるかということ、そうではない。住む地域も職業も固定されていた江戸時代、人生の選択肢が固定されているがゆえに進学や就職の際に何を選択すれば正解かという問題に思い悩むことはなかった。裏返して言えば、自分を自分自身に説明するには職業や出身などの社会的属性ですべてが語れるということだ。こうした状態の自分のことを「分」という。「分相応」や「分際」という表現に登場する「分」である。「分」は現代の日本でも日常的に使用される語である。しかもその用法は、世間から見た自分あるいは特定の人物の状況を想定して、世間が許す範囲を超えることに対して否定的な態度を取る際に用いられる。こ

これは個人を起点にして価値判断をするのとは正反対で、世間という社会的空間あるいは視点を起点にして価値判断を下す態度である。このように現在でも「分」を利用した言い回しの背後には自我が起点になっていないという非西洋的あるいは前近代的な態度が根強く残っている。

「自分」という語は明治に作られた。西洋から導入した英語の self など各国語で「自我」や「自分」を指し示す語を邦訳する際に、既に存在していた江戸時代までの概念の中でも近いものが「分」であると考えて、それを用いて作られた。こうして登場した「自分」は当初は江戸時代の意味を色濃くまもっていたと考えられ、社会的属性こそが我を表しているという意味であったと考えられる。これは現代人が考えている「自分」とは意味が異なる。

さらに時代を遡れば、平安文学には人称代名詞がほとんど登場しない。この文章の主語は誰なのか、誰が誰に対して言っているのかが書かれておらず、一文の途中で主語が変わることもしばしばであるため、現代人の感覚で文章を読むと意味不明に見える。文脈を意深く読むことでこうしたことを推測しながら読む必要がある。このような文章を書くことから推察できるのは、「個人」や「自我」という概念が不要であった、あるいは存在しなかったということではないだろうか。

いずれにしても、近代以前は「自我」や「自己」、「個人」という概念は不可欠なものではなかった。それゆえアイデンティティもまた問題にはならなかったものと考えられる。自分が所属している集団と神の契約から自我を特定したり、社会的属性から自我を特定できた時代は、アイデンティティも社会的に決まってしまうためである。前近代は自我がまだなかった時代とすることができるだろう。

こうして自我の歴史を見たときに、自我がま

だなかった時代から自我が確立し、不可欠なものになった時代へと時間が進んだことがわかった。ホモ・サピエンス時代の後にホモ・マキナリウスの時代になると考えると、自我のこの歴史はこの後自我が解消する時代へと進むというのが、この考察の結論となる。

自我が解消すると「生きる意味」は不要になり、「なんのために生きるのか」という問い自体が無意味になる。ホモ・マキナリウスにおいては一度生命を得た者は不老不死が可能である。生命を得ることがどのようなことであるのか、この点はまったくの未知である。現在の自然科学を中心とした科学では生命誕生がまったく解明できないからだ。生きるとはどういうことか、死ぬとはどういうことか、ホモ・サピエンスにとっては古代から重大なテーマであり続けているが、ホモ・マキナリウスには無縁の問題である。ホモ・マキナリウスにとって死とは機械が止まるか記憶が消えるかであろう。しかし、機械も記憶もいつでも入れ替えまたは更新可能であるため、機械を修理したり快調な機械に乗り換えたりすれば、また記憶は新たに入力すれば、それで再び生き続けることができる。無論、そうした不調があった時点で終了にしたければそれもできるので、その時点が完全死となるのだろう。

この論文の最後に、自我の解消という点でホモ・サピエンスとホモ・マキナリウスのあいだにあるのはまったくの断絶かということ、そうでもないことを指摘しておきたい。

ホモ・サピエンスにも近年自我の解消に向かう方向性と思われる傾向を見ることができる。たとえば経済の流れを見ると、個人が所有する経済が停滞を始め、その一方でシェアエコノミーが隆盛になりつつある。たとえば自家用車は日本の高度経済成長期のように経済が成長す

る過程で個人の生活がドラスティックに変化するときに急激に普及し、最初は1家庭に1台であったのがやがて家族メンバーが各自で所有するようになるという経過をたどることが多い。これが個人の所有の拡大である。しかし近年、主要先進国ではカーシェアや石油会社が必要な期間だけ顧客に貸し出すなどの形で個人所有が縮小し始めて、反対に社会的共有物としての自動車が増加しつつある。オフィスでは社員個人用の机を廃止して仕事に応じて随時移動しながら必要なときに必要な場所の机を利用する企業も増加しつつある。それどころか、インターネットとモバイル化の進行によりテレワークが可能になり、オフィスさえ不要のノマドワーカーも登場した。必要な情報をインターネットに預けることができるようになると働く場所の縛りがなくなるばかりか、情報量が多くても複数の人間の間で共有が容易になった。必要な時にインターネットから取り出すことができれば問題ない。こうしたクラウドシステム化が進むことで、知財の社会的共有や、あるいは人類全体での共有化がさらに進行中である。インターネットに接続できさえすれば、歴史の年号を覚える必要もなく、古典を暗記する必要もなく、元素周期表や公式を覚える必要もない。これまで受験勉強で身に着けた知識は身に着ける必要がなくなっている。音楽や映画の鑑賞、スポーツ観戦などもモバイル機器の普及で個人化が進展中であるが、それゆえ同時に一回限りの身体を伴う他人とのなまの共有体験の価値が増すことからライブやパブリックビューイングなどが大盛況である。このような状況がさらに進めば所有することの価値はさらに下落し、やがては所有意欲がなくなるばかりか、所有する意味がわからない世代がホモ・サピエンスに遠くない将来登場することになるだろう。すでにインターネットとモバイル機器により空間的な差異

は情緒的な意味を持つことができても必然的な意味はなさなくなり、時差のある地域間の通信はすでに解消されているように時間的な差異もない。情報に還元されるものはすでに所有ではなく共有（シェア）になっているが、前述の自家用車のように情報に還元されない物質的なものもこの先相当程度共有化が進むとなると、思考や世界観、社会の構成要因などすべての起点あるいは軸としての個人の自我については、個人と個人の壁が薄くあるいは低くなることから、自我は解消されなくとも近代的な絶対性が徐々に薄れて行く可能性がある。

近代を経た後の時代を生きているいま、ホモ・サピエンスにとって自我意識はいまだに必然的なものである。歴史を逆回しすることができないのと同じで、一度必然になってしまった自我意識はその前の状態に戻りはできない。これに対して新たに出現の可能性が想定される人類は自我意識に必然性がない。もしホモ・サピエンスからホモ・マキナリウスへの移行を進化ととらえるなら、次の人類は自我に縛られることはなく、自我の問題を抱える必要がないということができる。そうした歴史の流れを自我の解消ととらえるのである。

## 6 蛇足としての結語

折しもこの論文執筆時の2018年は明治維新150周年ということで、明治維新が日本の社会や日本人の生活に何をもたらしたか見直す機運が高まっている。明治政府が図った近代化策により西洋から各種の概念が導入された。その中に「個人」や「自我」がある。これらは当時の人々には理解が難しく、普及にかなりの時間を要したが、現在ではそのことが信じられないほど浸透し、これらの語なしに社会を語ることも、人を語ることもできなくらいである。こうして

明治維新から150年と言う節目の年に、自我が不可欠となった現代日本人の一員が自我の解消を論じることには不思議な因縁を感じる。

## 注

1 ユヴァル・ノア・ハラリ, 柴田裕之訳, 『ホモ・デウス』上・下, 河出書房新社, 2018年

## 参考文献

大槻知史著, 三宅陽一郎監修, 『最強囲碁 AI アルファ碁解体新書』, 翔泳社, 2017

岡田岳人, 『心身問題物語』, 北大路書房, 2012年

河部義信, 『はじめての論理回路』, 森北出版, 2016年

高橋宏和, 『メカ屋のための脳科学入門』, 日刊工業新聞, 2016年

高橋宏和, 『続メカ屋のための脳科学入門』, 日刊工業新聞, 2017年

西垣徹, 『AI 原論』, 講談社, 2018年

西垣徹, 『ビッグデータと人工知能』, 中央公論社, 2016年

西垣徹, 『集合知とは何か』, 中央公論社, 2013年

西垣徹, 『生命と機械をつなぐ知』, 高稜社書店, 2012年

西垣徹, 『続基礎情報学』, NTT 出版, 2018年

東中竜一郎, 『おうちで学べる人工知能のきほん』, 翔泳社, 2017年

山口裕之, 『認知哲学』, 新曜社, 2009年

ド・ラ・メトリ, 杉捷夫訳, 『人間機械論』, 岩波文庫, 1957年

ポール・チャーチランド, 信原幸弘・西堤優訳, 『物質と意識』, 2016年

レイ・カーツワイル, 井上健ほか共訳, 『ポストヒューマン誕生』, NHK 出版, 2007年

レイ・カーツワイル, NHK 出版編集, 『シンギュラリティは近い エッセンス版』, NHK 出版, 2016年

Edmund Husserl, "Cartesianische Meditationen", Felix Meiner Verlag GmbH, 2012

Godfried Wilhelm Leibniz, "Nouveaux Essais Sur l'Entendement Humain (2e Edition)", Hachette Livre - BNF, 1898

Godfried Wilhelm Leibniz, "La Monadologie et autres textes", Kindle, ASIN: B005R4IVFU

Rene Descartes, "Oeuvres complètes et annexes", Arvensa Editions, 2015